

## 逆境から得たもの。雲仙普賢岳噴火災害から12年を迎えて —被災地区を事例として—

開 浩 一\*

What Unzen volcanic survivors get from the adversity since the eruption in 1990.

Koichi Hiraki\*\*

### キーワード:]

トラウマ体験後の成長PTG (Post Traumatic Growth)

### 要 旨

雲仙普賢岳噴火災害は大きな被害を及ぼした。従来こうした天災は、与えた被害等などのマイナス面から語られることが多い。「逆境が自己を鍛え上げる道場」だとすれば、被災という逆境の体験を梃子にプラスに好転したもの、言い換えれば「逆境から得たもの」があると仮定する。本研究では、噴火災害により過酷な避難生活を強いられた被災者の損失を否定するつもりは一切ない。ただ、噴火災害という逆境の体験を通して何を得たのかインタビュー調査により検証する。その結果は、被災者の語りのなかから、①同様な災害被災者に対する理解と援助、②被災者間の絆の強まり、③家族愛と郷土愛の芽生え、④高齢農家の農業という重労働からの解放、農業の断念と新たな道を模索する機会、⑤強さを得る、⑥社会性の向上、などの成長要素が見受けられた。

### 経 過

1990年11月17日、雲仙普賢岳から2本の白煙があがった。1792年の「島原大変、肥後迷惑」と称された噴火から198年ぶりの噴火によって長崎県南高来郡深江町は大きな打撃を受けることになった。1991年6月3日、大規模火砕流が発生し死者・行方不明者あわせて43名という大惨事となった。同年9月15日の火砕流では153棟の建物が火砕流の直撃を受けた。大野木場小学校も炎につつまれ深江町民に大きな衝撃を与えた。噴火による猛威は火砕流だけにとどまらず土石流を発生させ大地を呑み込んでいった。1992年8月、土石流により59

棟が被害を受けた。追い立てられるように避難勧告を受けた深江町の避難者数は最大3,804人(943世帯)にのぼった。1990年時点での町人口が8,149人であったから、全体の46.7%の町民が避難したことになる。当初、被災者は町民センターや体育館に避難していたが、後に旅館や仮設住宅を転々とする不便な生活を強いられた。一過性の災害ではなく、終焉が見えない長期の避難生活により、被災者のストレスは蓄積されていった。常に誰かに見られ、慣れない共同生活と火砕流や土石流に対する恐れ等から不眠、肩こり、便秘を訴え、血圧が高い人が多数見られた。しかし、火山活動が沈静化に向け始めた1994年は、年間を通じて大規模な火災流と土石流は発生しなかった。翌年1995年3月、九州大学島原地震火山観測所の太田所長から活動停止発言が発表された。1年後の1995年5月、活動終息発言が発表され、復興への兆しが見え始めた。1993年、生活再建、防災まちづくり、および地域振興を柱とする深江町復興計画の基本案が策定された。1997年、島原半島全域を視野に入れた、島原地域再生行動計画(がまだす計画)が住民と行政の共同作業によって策定された。「がまだす」は島原の方言で「がんばる」の意味。防災工事、農地の災害復旧、交通体系の整備などの基礎的事業から、農林水産業や商工・観光業の振興、各種公共施設の整備など27の重点プログラムが決定された。事業は2001年までの5年間で実施される計画になった。1999年、島原深江道路が全面開通した。さらに、道の駅「みずなし本陣ふかえ」オープン。2000年、深江町大野木場小学校の新校舎が完成した。そして2001年には、普賢岳災害記念館がオープンした。噴火より12年の月日を経て、復興を遂げる深江町は新たな旅路を歩んでいる。

\* Received December 10, 2002

\*\* 長崎ウェスレヤン大学 現代社会学部 福祉コミュニティ学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

## ストレス

「がまだす」を合言葉に奮闘してきた現在の深江町では、過酷な被災体験は次第に過去のものとなりつつある。しかし、被災者にとって噴火災害当時の体験は忘れようにも忘れられぬすさまじさがあったことは述べておかねばならない。それは、本研究が逆境体験からの成長というプラスの側面に焦点を絞ることから生じる、被ったストレスというマイナス面を軽視する可能性を避けるためでもある。太田（1996）は長期に及んだ避難生活による精神的ストレスへの影響を次のように示している。

### ① 仮設住宅の生活環境

仮設住宅の狭さ、不便さ、衛生面での不備、個人や家族のプライバシーが保たれにくい状況、自分の家ではないことが仮設住宅における生活環境のストレスとなった。

### ② 家族関係の変化

子どもの通学問題のため別居、家族数が多すぎて別世帯、子ども夫婦はアパート、老夫婦が仮設住宅、子どもだけ親戚宅へ避難、夫のみが仕事のため地元に残るなどのさまざまな家族分離が起こった。反面、家族が同じ仮設住宅に避難した場合、生活空間の狭さに伴う家族内緊張などの別の問題が生じた。

### ③ 対人関係の変化

仮設住宅への入所は地域がまとまって応募したため、馴染みの関係はある程度保たれたが、隣に入所した他の地区出身者とは「よそ者」として交わりたくなかった。特に高齢者にとっては、思ったことを自由に話せるような馴染みの関係が薄れるのはこたえる。次第に閉じこもり孤立するようになった。対人関係の希薄化がストレスを生む原因ともなる。

### ④ 失職と転職

田畑を呑み込まれた農家は、土地と同時に職を喪失した。家族を養うために、出稼ぎ、日雇い労働、職業訓練などの苦しい選択を迫られた。失職と転職を余儀なくされ絶望感と無力感に沈んだ。

### ⑤ 役割の喪失

災害前、高齢者は農業に従事していた。災害後、農業を断念せざるを得なかった高齢者は急に老け込んだという。役割の喪失するということは存在価値の喪失でもある。

### ⑥ 将来への展望のなさ

予想に反して避難生活は長期化した。少ない

人で4～5回、多い人で10回以上の避難場所の変更を余儀なくされた。終わりが見えない火山活動と、それに伴う避難生活が住民の先行きを曇らせた。

### ⑦ 復興対応をめぐる住民間の軋轢

復興を巡って住民間の意見は食い違いを見せた。地縁、血縁を超えて対立する可能性もあった。被災住民にとって最も効果的な心理的援助は家族や友人から得られるものが多いなかで、こういった住民間の軋轢が深刻なストレスを生むことが多い。

### ⑧ 行政の対応への不満

大規模な自然災害では、行政がどれほど尽力尽くそうとも、住民に対する対応に遅れることもありうる。正確な情報が伝達されないために、住民が誤解や不満を抱くことも多い。「行政は困った時に何もしてくれない」という感情が渦巻く。それが避難生活による精神的ストレスに加算される。

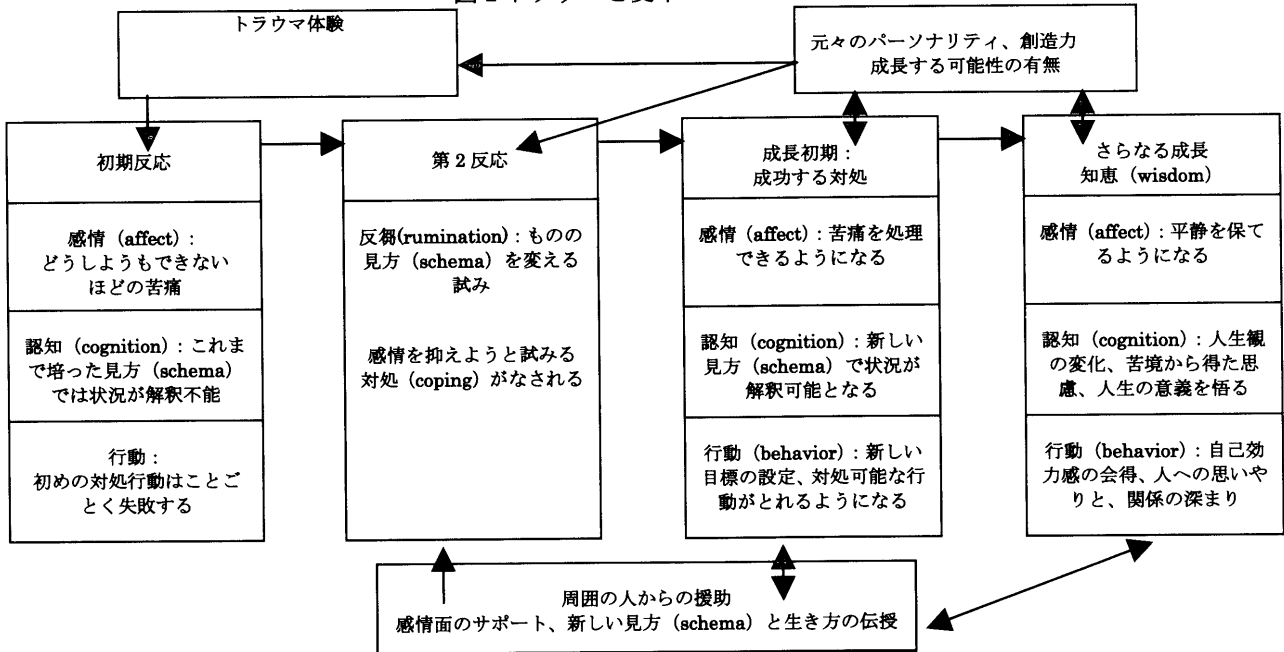
このように災害による影響はあらゆる面に派生した。さらに、災害の長期が被災生活も長かせ、終焉が見えない状況のなかで、ストレスが雪だるま式に膨れ上がった。成長に焦点を置く本研究を遂行するにあたって、避難生活当事者に上記のストレス要因に翻弄されたこと、また、今も尚ストレスに悩まされている可能性があることを肝に銘じなければならない。

## トラウマ体験後の成長：PTG（Post Traumatic Growth）とは

逆境をプラスに転じる発想は多くの先人が語っているが、それを組織的に構築したのがTedeschiとCalhoun(1996)の功績であろう。トラウマ体験後の成長PTG（Post Traumatic Growth）を紹介したTedeschi&Calhoun(1996)はトラウマ体験が人にもたらす5つの成長項目を見出した。①人への思いやり、関係の強化（Relating to other）、②新たな活路を見出す（New possibilities）、③人生への感謝（Appreciation of life）、④強さを得る（Personal strength）、⑤精神面の変化（Spiritual change）。癌、配偶者の死、自然災害、戦闘体験などのトラウマを体験した多くの人からこうしたPTGが見られている。PTGの成長までの心理的過程を詳しく見ていきたい。（図1参照）

トラウマを受けた初期段階の心理状態は窮地を

図1 ト라우マと変革



Trauma & Transformation From Tedeschi and Calhoun (1995) により作成

極める。絶えがたい苦痛（感情：affect）、既存の見方では解釈できない（認知：cognition）、どう対処しても上手く行かない（行動：behavior）。このように初期対応がことごとく失敗する体験を経て第2段階へ移行する。ここでは、感情を何とか抑えようと試みられる。また、これまでの見方を改める（反芻：rumination）。そして、状況にどう対処したらいいのか思考を巡らす。この段階から、周囲の人からの感情面のサポート、新しい見方、対応の仕方などのアドバイスを受ける。この周囲からの援助が成長を开花させる。トラウマの受容、目標の変更、新しい意味付け、新しい見方へと変わるなどの初期段階の成長が見られ始める。さらに、自分に自信がもてるようになり、惜しまずに援助してくれた人への感謝の気持ちを抱く。最終段階では、成長は継続化し内面化する。当初の苦悩と比べて、ずいぶん平静を保てるようになる。トラウマ体験を新しい意味と物語として自分のもとする。対処行動が有効に働くようになる。この成長までのプロセスを大きく左右するのが、本人が元来持ち合わせたパーソナリティーによる。その成長を促進する内的な心理要素は以下の：内的統制型 Internal locus of control (Rotter, 1966)、自己効力感 Self-efficacy (Bandura, 1977, 1982a)、自信 Self-confidence (Schaefer & Moos, 1992)、楽天的思考 Optimism (Scheier & Carver, 1985)、ハーディネス Hardiness (Kobasa, 1979)、強健性 Resilience (Beardslee &

Podoresfsky, 1988; Green, 1986; Rutter, 1987; Werner, 1984)、一貫性の感覚 Sense of coherence (Antonovsky, 1987)、創造性 Creativity (Stickland, 1989)。こうした心理的傾向の持主が逆境から成長を見出す可能性が大きい。

### トラウマの定義

本研究では、このトラウマ体験後の成長PTG (Post Traumatic Growth) を柱として展開し、普賢岳噴火災害の被災者の語りに、この成長要素が見出せるかどうか検証する。

トラウマの定義を、ここではTedeschi & Calhoun (1995)を参考にして以下のような出来事に遭遇することとする。①突然の予期せぬ出来事 (suddenly and unexpectedly) ②対処不能に陥るような出来事 (perceived lack of control) ③通常起こり得ない出来事 (out of ordinary) ④問題が恒常化する出来事 (degree to which long-lasting problems)。普賢岳噴火災害の場合、噴煙が上がってから、土石流や火砕流の被害が出るまでに半年ほどの期間があることから、突然の予期せぬ出来事とは言い難い、しかし、予想を越えた被害の拡大と長期化に翻弄されたこと。また、198年前の島原大変を初めとして噴火災害の経歴は重ねているが、当時の被災者にとっては火山災害という通常起こり得ない出来事に遭遇したこと。そして被災生活が長期に渡ったことを考慮して、普賢岳噴火災害は上記のトラウマの定義を満たすと考

える。

## 方 法

2002年3月4日から8日、また8月22日に調査を行った。深江町役場の保健婦に紹介していただき、雲仙普賢岳噴火災害の被災者、女性9名と男性2名、深江町役場職員5名の合計16名にインタビュー調査をおこなった。その大半が避難勧告を受け自宅を引き払い、体育館、旅館、ホテル、仮設住宅、親戚の家、アパートなどを転々と移り住むなどの避難生活を余儀なくされた。インタビューの開始時に研究の趣旨、守秘義務、テープに録音する意向を話し合い合意を得た。被災から12年という月日が流れているため、体験を語ることに對する抵抗も軽減されていると仮定するが、辛い体験に触れることによって生じる可能性がある心理的負担への危惧から、常にインタビューを中断する権限を与えた。特に本研究が被災体験から得た成長面に焦点を絞るために、被災者が悲痛の渦中にあるときは成長面の否定、反論、逆鱗に触れるといった反応が予想され、インタビューには慎重さが要求された。参考となった質問手法が、DurbanとMuellerがエイズに生きる女性の心理的・精神的成長をみる際に使った(Durban and Mueller model)である。それをういて次のように尋ねた。「逆境の体験をしたからこそ、逆に何か得るものがあったと言う人もいますが、あなたが被災生活の体験から何か得たものがあるとするならば、教えていただけませんか？」

## 考 察

被災者の言葉から以下のような成長した側面が見出された。

### 1. 同様な災害被災者に対する理解と援助

1995年1月28日、阪神淡路大震災が起こったとき、普賢岳噴火災害の被災者による救援活動の動きは目を見張るものがあった。トラウマを被った人は、同様の悩みを抱える他者に対してより援助を差し伸べる傾向がある(Tedeschi,1989;Wuthnow,1991)。インタビューを行った被災者のうち4人が、阪神淡路島大震災や三宅島噴火災害の被災者に「自分が体験したからこそ気持ちがわかる」と同じ災害被災者としての理解を示し、実際に援助を行った人もいた。

女性(82歳)「神戸ん人は未だに仮設に入っとでしようが、テレビまみちんぎねえ、

本当かわいそうと思うですよ。自分たちが苦勞しとってすけんね」

女性(26歳)「三宅島とかさ、今テレビでありよるけどさ、大変ねえと思うって、自分たちとぜんぜん違う状況よね、わぁ島にも帰れんで大変よねえ」

男性(73歳)「今やったら、どがんかわからんですけど、こちらは、災害が早かったですから全国からの義捐金ば余計もらいました。こんな災害を受けた内では時期がよかったですね。まだ国としても余裕があったですから。いい時期やったですね。今ごろやったら大変ですよ。義援金も集まらなんでしょうし。それで、神戸とか淡路島あたりでも、真っ先になって義援金をやるんですよ」

女性(48歳)「神戸のあれを見て、どうして家が斜めになっているのか、自分達がなかったらそこまでしなかったと思うんですよ、自分達があったからこそ、そちらのほうに目が行って、自分達もそういう気持ちになれる。変わってきてると思うんですね。だからもう、してもらったんだから、一度にしてやらなくっちゃというのが、皆あるんじゃないですかね、本当にみんなに助けてもらってよかったという気持ちがあるから、なんかの形でお礼をしたい、しなくっちゃというので、なんかの形でという気持ちが多いと思うんです」

のちに阪神淡路大震災が起こったときに、積極的に支援活動をおこなったのが災害の先輩にあたる雲仙普賢岳災害の被災者であった。この被災者による被災者援助の行動について、同じ境遇にある者を支援することで、自分がこれまでに助けられたことへの恩返しをする。全国の人々との互酬的關係(山下、1998)が原理となっているのではなからうか。上記の被災者も全国から多大な支援を受けたことに対して感謝の気持ちと、だからこそ人も助けてあげたいという気持ちが表れているようだった。

## 2. 被災者間の絆の強まり

大きな被害を及ぼす自然災害のように、個人一人の力では太刀打ちできない事態に遭遇したとき人は団結して対処する道を探る。山下（1998）は災害時のコミュニティ構造はルースからタイトへ強化すると論じた。TedeschiとCalhoun（1996）もトラウマ体験は他者との関係を強化すると述べている。普賢岳噴火災害の被災者の間でも団結して災害に対処する中で、新たな人との関係が築かれ、人を思いやる気持ちが生まれた。

女性（48歳）「皆協力し合って何とかやってきたから、そこで新しいつながりができた。皆がそれぞれのこと思うようになりましたしね」

元来、人がいい、援助を惜しまない深江町民は、仮設住宅生活時にもその良き気質を発揮し、各々が仕事を分担することで助け合った。それは、忘れがちな感謝の気持ちを抱かせた。

（保健婦） 「深江ん人は、人がよかけん助けてもらゆっとですよ、何でも、仮設にすっときも、お茶は誰かが沸かして、掃除は誰かがするしで、皆でしたね」

女性（82歳）「ようしてやりましたすけんね、じぶん達も、そいけん頼りしてから、何でん話すとですたい」

（保健婦） 「今まで、人のありがたさのわからんじゃった人でも、わかってこらしたっちゃなかですか」

普賢岳噴火災害の体験により、共同で対処することを迫られた被災者間に連帯感という恩恵をもたらした。ところで、山下（1998）は、普賢岳災害後のコミュニティの強化を促進した要因が土着的社会にあると述べているが、深江町民が災害後に団結をもたらした秘訣はここに隠されてあるのかもしれない。土着的社会特有の、すでに形成された密な関係があったからこそ、窮地に対応して手を携えるなかで、さらに関係の深まりが強まったと考えられる。

## 3. 家族愛と郷土愛の芽生え

トラウマ体験が人への思いやり、関係の強化を

促すことはすでに述べた。災害によって被災者の関係が強化されたと同様に、家族関係や親戚との関係も強化したという声も聞かれた。被災者の声に耳を傾けみると、避難生活で家族が離れて生活することで、家族の大切さを感じた。災害下では、一番頼りになるのが家族だと痛感した。音信普通だった親戚との交流がはじまったという声を聞いた。また、支援してくれた仲間のいる深江町に一生とどまる決意をした。さらに、一時は地元を離れるが、また帰りたいたいという気持ちが強まったという郷土愛もうかがえた。

女性（26歳）「なんかこう避難して、家族の大切さっていうか、そういうのを感じるようになった。離れて暮らしたり、祖父と祖母と離れて暮らしたりしてたり、そういうのがあって、皆で避難して、家に帰れないときがあるじゃないですか、皆で家に帰りたいて、家に帰りたいてよねって、なんか、県外に行ったときも地元に戻って仕事をしたいなって、あの、親の近くにいたいなって、っていうのはこう、帰ってきたいなというのがあって、なんか、それは、それまでは、あんまり考えたことがなかったけど、避難してこう、ありがたいな、というのが強くなって、地元に戻って仕事をしたいなっていうのは強く思った」

男性（47歳）「一番頼りになっとは家族ですよ、家族を大切にせんばダメですよ、もう家がなくても、金がなくても、家族が無事であつたけんですな、家族が無事であればどうにか力を合わせていけますけんね、そいはもう、働けば金はでてくっですけんね」

深江町役場職員「東京に親戚があるんですよ。それまでは音信普通というか、親戚が東京にあるなあというのはきいたんですけど、災害からですね、電話があつてみたり、そして色んな品物を送ってきてくれたり、今も年賀状をやったりして、昨日も深江町の特産を送ったりして、また向こうから、年に1、2回で

すけどね、そういうのは災害がもたらしたですね」

女性（44歳）「主人とよく話すんですけどね、一時はよそに、今の仕事やめて行こうかと、言っていたんですけど、でも、やはり、どうしても行くことができなかった。けっこう仲間の人に支えられたんですよ、牛小屋提供してもらったり、いろんな面です。だから、やっぱり、こういう人たちの仲間のおところで、じゃ自分たちも、この深江で一生を過ごすんだなと。よそに行くことはないでしょうね」

被災生活で窮地に陥ったときに仲間に支えられることで、深江町という郷土に対する愛着が生まれた。また、避難生活による影響は、家族の分離というストレスを生じさせたが、家族が離れ離れになるという窮地を体験したからこそ家族の大切さを学ぶいい機会になったのではないかと考える。普段の生活において、当たり前すぎて意識することのない郷土への愛着、及び家族のありがたみであるが、この当たりのありがたさを享受できるのは、被災生活を送った人の特権ともいえる。

#### 4. 高齢農家の農業という重労働からの解放、農業の断念と新たな道を模索する機会

トラウマ体験が新たな人生の活路を見出す機会となるというが（Tedeschi&Calhoun,1996）、火砕流や土石流が農地を呑み込み、降灰が農作物に大きな影響を与え、農業を断念せざるを得なかった農家にとって噴火災害は好機であったのだろうか。苦心して農業を続けるか、新たな道を模索するかの選択に迫られた農家の声を聞いてみたところ、2人の元高齢農業従事者は職の喪失という事態を前向きにとらえているようであった。

女性（72歳）「私は曲がとったけんです仕事ばしいきらんと思ひよたつとですよ。ああよかった、こん火砕流のきたけん、よそにいて、そん力仕事ばせんでよかし、何もせんでよかけんよかったよ、と思ひよたつとですね」

男性（73歳）「前は山手のほうで苦勞して農業、

畑で貧乏な農家が多かったもんですから、こちらで便利もよくて環境もいいところで生活ができるもんですから、ある程度、全部満足しています。前みたいに山手で農業ばしよったら、農業も今大変ですもんね。年寄りなんか本当によかったですね。農業ばしよったら死ぬ間際まで手伝いばせんばいかん」

この2人の意見が農業従事者全ての声すべてを代表するのかここでは測定できない。高齢の農家にとっては農業の断念が生きがいの喪失になったという声を聞く中で、この2人は被災による農業の断念を高齢農家の重労働からの解放と見なしていた。一方、多くの働き盛りの農家は生計を立てるために新たな分野への転職を余儀なくされた。深江町の15歳以上の産業別就業人口の平成2年から平成12年の推移を見ると、災害を期に農業人口が減少したのに反比例して建設業やサービス業の人口が増加したのがわかる。農業人口1,020は729人に減少した反面、建設業は393人が566人に増加、またサービス業も862人が1,076人に増えた。

男性（47歳）は18年間営んだ農業を断念し建築関係の仕事へ転職した一人である。今の仕事人がに使われる身である立場にあることと比較して、農業を営んでいたときに自分が大黒柱であったことを懐かしむ。反面、現在の仕事が天候に左右されず、安定した月収があることに魅力を感じ、何より町の復興事業に携われる仕事に現在懸命になっている。

男性（47歳）「比較すれば、今はどうしても使われる身ですから、農業をしよるときは企業で言えば一家の大黒柱ですからね、（中略）、一番何ていいますかね、考え方の中で、もう災害において、流れの中で、はっきり言うてですよ、農業をしている。今の会社とすればですよ。そういう点は、嫌なことがあればあゝこっちが良かったなあと思うし、まあ流れの中で、もう今は降灰はないですけど、降灰がありよる時に、作物を作っても降灰でやられてしまう、あゝ今年も収入がおぼつかんってなれば、もう決まった月の収入、子供が小さかったも

んですからね、毎月の収入が魅力やっただけですたいね、(中略)、得たものっていうとは、まあ、こういったかたちで、建設関係復興事業に携わってたというかたちでは、私にとって得たものじゃないかなあと、島原深江地区の復興に関しての、何と云いますか、自分も貢献しているんだとかたちです、そんなかです、今もせいっぱい仕事に精出しよる状態ですよ」

農業に対する未練と新しい職への魅力を天秤にかけるなかにも、現実の生活をいい方向に考えようとしているようであった。農業の断念と新たな道を模索する機会を「成長」とみなすにはあまりに無神経ともいえるかもしれない。仮に成長といえるのであれば、成長をもたらしたのは農家の方々の転職という英断と苦渋のなかの発想転換によるものであろう。

## 5. 強さを得る

トラウマという困難な体験は、逆境を切り抜ける術を学ぶ機会となり、その体験を通して自分の強さが育まれる (Tedeschi & Calhoun, 1996)。災害の体験から自信を得た2人の被災者の声には力強さがこもっていた。

女性 (48歳) 「こんなに元気になるんだぞというのはやっぱり伝えていきたい、でも本当に皆様のおかげで元気になったでしょう。それを伝えていかなきゃいけないなって、(中略)、いろんな経験が、本当に子供達も私達も災害があったからいろんなことを経験できる、反対に、させてもらえるということでしょうね、これがなかったら、本当にのほほーんと過ごしていたかもしれませんね」

女性 (44歳) 「今44ですから、あゝ33。若かったんだ。まあ、図太くなりましたよ」  
筆者 「これから何が起こってもまあ何とかやっていけると」

女性 (44歳) 「その自信はありますね」  
筆者 「すごい体験されましたからね」

女性 (44歳) 「そうですね、意外とその当初はパ

ニックッてる時がけっこう多いですけどね、ひとつ離れてしもうたらそんなでもないですね。意外と冷静に見れるようになりました」

普賢岳噴火の体験はある意味において、人が滅多に遭遇しないことを体験できる貴重な機会であったかもしれない。トラウマ体験から得る最も大きい恩恵は「強さ」を得ることではなかろうか。辛い体験こそ人を成長させる最短な近道でも有り得る。「普賢岳の噴火に耐えた、これから何があっても耐え抜く自信がある」といっているように思えた。体験によって培われた逆境を生き延びる術こそ、これからの人生を生きる被災者にとっては大きな財産であるのかもしれない。

## 6. 社会性の向上

普賢岳噴火災害が全国に報道されるようになると、被災者がマスコミ関係者と接触する頻度が増大した。これまで社会性に乏しかったとくに農村の被災者にとって、社会性が培われる機会になった。

深江町役場職員 「人間関係が、もうマスコミがずっと取り囲んでいますから、社会性ができてきたと思うんですよ。対応も上手ですよ、上手くなったですよ。特に農村は対応がまずいいですか、素朴性があるといえますか、積極性がない中で、伸び伸びとした人間性がはぐくまれたと思います」

## 成長へと導いたもの

### 1. 政治的後押し (political climate)

普賢岳噴火災害の被災者はこの逆境からいかにして上記の成長へと導いたのであろうか。Tedeschi と Calhoun はトラウマ体験者が成長へと向かう過程において周囲からのサポートの必然性を説いている。災害の発生にともない、深江町に全国から多額の義援金と多数の救援物資が寄せられた。その基金が生活や住居の安定、生業の支援、雇用者対策などの自立復興への事業に使われた。被災者の話のなかで義援金と救援物資のおかげで災害復興できたという声を多く聞いた。

男性 (73歳) 「全国から色んな義捐金もたくさん

もらいましたし、住宅もぴしゃっとできましたし、深江町の場合は900万、焼失した人はもらいましたね、そんでこんな家ができただけですから、生活環境も良くなりましたし」

マスローの欲求階層説では、人間が生きる上での食料や衣服や住居などの生理的欲求や安全欲求が満たされることが前提となるように、義捐金・救援物資の支援により、災害後の生活が再建しない限りは、逆境から恩恵を受けたと実感するには至らなかったであろうと考える。Bloom(1998)は、逆境体験者が体験から成長をするのは、政治的後押し (political climate) の有無によると論じている。被災者の成長を垣間見られた要因として、義援金や救援物資の支援という政治的後押しが背景にあったと思われる。

## 2. 私一人ではない

性的虐待をはじめ個人のみが被害を蒙ったとき、被害者が一個人に限定されるために、「なぜ私だけがこんなめに」という悲嘆をなかなか拭い去ることができない。反して、自然災害を例として、コミュニティが被害を被ったとき、コミュニティ要員の全てが被害者となる。「こんなめにあったのは私だけではない」という気持ちが奮起させる大きな原動力になったと考えられる。(Janoff-Bulman, 1992)

女性 (44歳) 「自分だけじゃなくって皆が同じように災害に遭っているからですね。あきらめがついたんですよ。自分だけやったら悔やんだり何だりするかもしれないですけど、しかたがないですもんね、どうしようもないから、これに、どうこう文句言ってもしゃあないし、対応していくしかないじゃないですか、だから、強くなれたんですよ」

女性A (26歳) 「けっこう、こう、自分だけじゃなかった」

女性B (26歳) 「みんなやったもんね、(中略)、同級生21人、皆、家がなかったから、一人じゃなかったしね、自分だけやったら、また、違ったかもしれないけど、それなりに高校生活楽しかったし」

性的虐待をはじめトラウマを被った被害者は、当事者会のなかで心の傷を癒し合うことが実践されているが、普賢岳災害のようにコミュニティ全員が被害者となった場合、コミュニティそのものが当事者会の役目を果たしたのではなからうか。「私だけではない」という安心感が身近にあることが、どれほど励みになったであろうか。

## まとめ

普賢岳噴火災害を体験した被災者が逆境から得たものとして、①同様な災害被災者に対する理解と援助、②被災者間の絆の強まり、③家族愛と郷土愛の芽生え、④高齢農家の農業という重労働からの解放、農業の断念と新たな道を模索する機会、⑤強さを得る、⑥社会性の向上、などの成長要素が垣間見られたと考えられる。歯切れの悪い結論であるが、成長があったと断言できないのは、事例研究の限界により、この6項目の成長要素が普賢岳噴火災害の被災者すべての声を代表しているかについて本研究では証明できないこと。また成長要素を抽出する際の本研究者のバイアスがかかっている可能性を否定できないからである。しかし、本研究を通じて、被災者にとって災害という逆境による影響が必ずしも損失ばかりではなく、逆境から得たものの“傾向”を見出せたことを一つの成果として考えたい。

マイナスの中にプラスが、プラスの中にマイナスが存在することは仏教が善悪不二という言葉で表現している。論議してきた逆境というマイナスからプラスに転じる発想は、宗教、哲学、多くの先人が語っており革新的な発想ではない。しかし、我々は危機的状況に陥ると損失の大きさに焦点がいくあまり、損失から利益を生もうとする発想は陰を潜めてしまうのではなからうか。

深江町の人口は、噴火が始まった平成2年に8,422人、平成7年に7,877人と減少するが、復興期にある平成12年には8,149人まで回復した。災害による甚大な被害を被った町は、その痛手をバネとして立ち上がり、防災に強い町づくりを目指して見事に復興を成し遂げた。マイナスの中にプラスが存在することを深江町の災害被災者が証明してくれたと考えたい。最後に、この研究に多大なるご支援をくださった深江町の保健婦さん、及び貴重なご意見を下さった被災者の皆様に感謝と、深江町の更なる復興を願ってまとめとする。



## 参考文献

- 荒木正利、『普賢岳噴火災害との共存』日本図書刊行会、1994
- 大田保之、『災害ストレスと心のケア：雲仙普賢岳災害を起点に』医歯薬出版株式会社、1996
- 後藤恵之『復興の「教訓」：「普賢岳」からよみがえった10年』長崎新聞社編著、発行者：山本章、2001
- 高橋和雄、『雲仙火山災害における防災対策と復興対策：火山工学の確立を目指して』九州大学出版会、2000
- 深江町企画課復興室、『明日の豊かな実りのために！深江町復興計画 NAGASAKI. FUKA E』防災都市計画研究所、1995
- 長崎県総務部消防防災課、『雲仙・普賢岳噴火災害誌』昭和堂印刷、1998
- 長崎県南高来郡深江町、『新たなる旅路：深江町勢要覧』日本出版九州支社、2002
- 山下祐介、「阪神・淡路大震災と島原のコミュニティ」、鈴木 広編、『災害都市の研究—島原市と普賢岳—』九州大学出版会、1998、pp275-289
- 「災害都市の法則：ルースなコミュニティからタイトなコミュニティへ」、鈴木 広編、『災害都市の研究—島原市と普賢岳—』九州大学出版会、1998、pp302-306
- Bloom, S.L, 'By the Crowd They Have Been Broken, By the Crowd They Shall Be Healed: The Social Transformation of Trauma'
- Tedeschi, R.H. Park, C.L. & Calhoun, L.H. "Posttraumatic Growth: Positive Changes in the Aftermath of Crisis", Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 1998.
- Dunbar, H.T., Mueller, C.W., Medina, C., & Wolf, T, 'Psychological Spiritual Growth in Woman Living with HIV.' *Social Work*, 1998, Vol 43, No2, pp144-154.
- Tedeschi, R.H. & Calhoun, L.H. "Trauma & Transformation: Growing in the Aftermath of Suffering G Posttraumatic Growth: Positive Changes in the Aftermath of Crisis", SAGE Publications, 1995.
- Tedeschi, R.H. & Calhoun, L.H. 'The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the Positive Legacy of Trauma.' *Journal of Traumatic Stress*, 1996, Vol.9. No.3, pp455-471.